

安部先生と野球人生訓

塩 沢 元 次

安部先生と親しくお逢いできたわけ

安部磯雄先生が、新島先生の高弟の一人として、新島先生にお逢いして恥ずかしくない生涯を貫かれたのは、結局、新島精神（個人の自覚、人間に尊重、神の愛の普遍化）を人格の要素として、身をもって実践されたからであろう。そのきよさ、きびしさ、強さ、そして重量さには後輩の私など、唯々頭がさがるばかりである。

このすぐれた先輩に、私が幾度もお逢いできたのは仕事のことからであった。先生は博愛の心で貧乏と失業をこの日本からなくしたいというので、キリスト教社会主義者として社会民主党、社会大衆党そして日本社会党という一連の革新政党（当時は無産政党）と

いう名も実感もあった。今のような労働貴族はなかったから）の創立者であり、初代党首という大立物だったのだ。私は新島黨の同志社に入学した初めから新聞記者になつて紙上で説教してゆく『志』であつたし、その宣言を仲間にしていたから、卒業と同時に、当時としては初めての入社試験（英語とか作文とか）をうけて、日本一（配達のハッピにもちゃんとそう書いてあつた）の時事新報という福沢諭吉の新聞にはいたつたのだ。

ところが『大正十年』といえは、天下の大労働争議が賀川豊彦、鈴木文治、松岡駒吉、西尾末広ら諸氏の指導で勃発した頃、老練な事件記者（三面記者といつた）でも、デモ、サボ、ストなどという西洋の言葉はにがて、

そこで社会政策のはしくれでもかじつたものというので、東大新人会の山崎という男と私が選ばれて社会運動（労働運動、無産政党、農民運動、解放運動、思想運動）専門の記者になつたのだ（私がかじつたのは山本美房先生の工業政策、山口正太郎先生の社会政策であつて、今から見ると学問になつていかどうかしらんが、社会政策はとにかく新物だった）。当時は大杉栄さんのアナを先頭に、堺や枯川さんなんかのボル、下っぱの労働群までサンデカリ調で凄くいきまかれたものだったが、唯一人安部磯雄だけは慈父に接することく、恩師に導かれるように、いくらマルクス主義の影響はうけていても、根が新島先生から魂を打込まれていただけに、闘争第一主義などではなく、

精神主義であつて、きつい々階級憎悪などの言葉はなく、結局貧乏階級を救うという人類愛にとけ込んでのワク内にあつたように思うのだ。私なども左々がかつた記者(各部長から編輯局長になる前日まで)特高々の尾行がついていた甲種要視察人だつたから)ではあつたらしいが、根は同志社で水崎基一師に「新島精神」を叩き込まれている後輩なのだから、お逢いでできれば無産政党に關しての仕事(記事)がすんでから、先輩の先生からいろいろのお話を聞いたものであつた。ここでは々野球人生訓々ともいう平凡ではあるが、若い私にとつては身にしてみた教訓だつたので書き出したのだ。

々野球々の話がそのまま々人生訓々だ

『社会運動における安部先生』のことは、当時の私の商売だつたから、いくら書いても尽きることを知らぬものがあるが、新聞記事にしまつた々会見談々のなかで々野球の話々一日本における々野球の父々から野球のことなど聞くのは当り前すぎるが、先生は米国の何とかいう学校でテニスの選手もされており々スポ感々は鋭かつたかも知れないが、(a)野

球を見られる眼もやはり精神的だつたので、若い私には処世訓としてショックキングだつたのだ。(b)それに日本も米國と並んで野球が盛んであるが、々ホームラン々ばかりに気をとられていて、『野球精神』がわかつていない、この父の声を知らないアンチャンもかなり選手にもファンの中にもあろうと思うから、先生のお言葉そのものではないが、頂いた要旨を述べて書きたいのだ。それは、

① 今日(当時)実社会の求めている人物と對するのは々積極的人材だ々というのだ。自分對してのみでなく、自分の仕事に對してはいうまでもなく、廣く、人類とか、社會に對しても強い愛情をもつて、自ら進んでそのために尽してゆく。勇氣をもつて実践してゆくことが大切だ(言われただけしかやらないあるいはみせかけのごまかしの態度で所謂要領よくやってゆくだけでは人生をムダにするものでゴマかしの生き方だ)々野球々というのはスポーツの中でも々積極性々を貫いてゆく処にすばらしさがある。しかも根本の人間精神、人間生活の態度としては、(a)善意(グッド・ウィル)に徹してゆくこと。(b)すべての動作のきびしい中にも、寛大(ゼネロシティ)

が含まれて々秩序々を進めてゆくこと。ここに、(c)ファイナルプレーという要素があるのだ、といわれたのだつた。

野球のよき(精神的に)一特色というのは、② 無制限、快打一にある。ルールは勿論あるが、結局人間にとつて何らの制限もなく思ひきつてやつのける、力のありつたけを出しきつてゆける一ということとは、野球の持つすばらしさである。自分に神が与えて下さつた能力をちゃんと自覚できて、それを順々にのばしてゆける。自信も生れ、自愛もたぎってくる。自己能力の發見、男ならやつて見よ!だが、女も加えて人間は大空に向つてホームランを打つ一出しおしみのない生活、それは々長島々やアベバだけでなく、自分の持つてゐる實力を仕事に、生活に、奉仕に出しきつてゆく、々人生は無制限快打にできている々ことを野球は教えているんだというのだ。

③ 攻防その処を換える、一なども味わうほど妙味が出る。攻める立場、守る立場、それがグループ全体でチェンジして九回以上も重ねてゆく。まことに々気の効いた人間秩序だ々といわれるのだ。『一日何んとか』というのがちか頃はやるが、あんなごまかしの宣伝で

なく、実戦で攻防の立場がかわるのだ。各々が相手の立場、気持、主張、動作、作戦を認めあって、そこにチーム全体が相手のチーム全体と調和を保って、競争は自由できびしいが、動を続けてゆく、競争は自由できびしいが、そこに全体の調和が保たれて順序よくゲームは進行されてゆく、相手（他人の価値）を認めあうところにのみ調和がある。調和のないところには平和などあり得ない。平和のないところには進歩はない。日本の議会制民主主義はどん底におちて、もはや日本にはこれを育成してゆく土壌がないかも知れぬ、などとさえいわれるが、相手（小政党）を認めずに尊重せず強行突破したり（自民相手に、絶対反対）して審議を物理的に妨害をしたり（社会）しては、議会政治は成立しない。攻防の気持を認めあえば、こんなことにならぬが安部先生の野球の話でも聞かせたいところだ。（米中の対立だって、こんな事態を進められてはアジアがたまらない、どこかでゆずりあって、ゆるしあってゆかなくては――）

④ 二度の失敗は許される、三度目に成功すればよいのだ。何んという人間性の豊かさか、二度は空ぶりでもボールでもよい、三度

目に打てばよいのだ。三振というのは欠点だ、恥辱だ、失格だ。それがこども二人まではよい、チームの中から三人出るとチェンジして、主権を奪われるのだ。人生成功、勝利への秘訣は、主権を握ってゆく時間をなるべく長く保つことだ。長く保つたら反省することだ。

⑤ 三度というのは誰にも万刃なく機会（めぐみ）を与えるという原理に基く。チャンスは誰にも巡ってくるのが野球の面白いところだ。

⑥ 人をかえらる、というのもゆとりがあつてよい。(a)消極的にはデッドボールなどがあつて、とにかく盗塁に困難な状態の時などは、足の早い人がその時のチーム（九人）以外から代つて走れるとか、(b)積極的にはこの一人の打者によつてこのチーム全体の勝敗に決定的なポイントとなるというピンチの際に打者が専門家にかわるということも最高能力発揮の戦術として許されているのだ。

⑦ 構造変化のほげしい今年からの経済界などには、この辺の人事に妙を得ることが肝心ではあるまいか。

⑧ 犠牲球 全体の前進とか勝利のために貴

い一点を狙うために、自分は多分死ぬであろうと予想されつつも、ここでは犠牲球を打って他人をホームに近づけ、あるいは飛込ませる、こういう、非常時処理が許されているのも仲々人生の機微、人間集団の連帯性をよく捕えていて教えられるところが多い、といわれたのである。

その他幾つかのすぐれた精神と秩序、巧みな運営をお聞きしたが今はおぼえていない。最後に先生が特に力を入れて話して下さったのは、チームワーク、という結びであった。

そこで――世界人類の前途に及んで、

① 西洋文化、というのは分析、分裂、対立、競争、抗争、闘争、革命、戦争というのだが、なかで(a)自由主義文化はそこにキリスト教を中心にしたヒューマニズムの一線があつて、チームワークがとれてゆくのである（神の愛を説かれた先生の面目躍如）が、(b)生産主義文化はひどい独断の上になつて、自分だけが正しいので、他は抹殺されるべきものだ、という風に独裁による全体主義になつてゆく、これには精神的要素、人間の態度が欠けているので、チームワークがとれない（中々

のケンカを予言されたようなもの」といわれた。しかるに、

② 東洋文化はいろいろな考えがあるが、それが互に認めあつて、最後にまとめてゆく調和の原理を持つて進んできている。沖^{ウチ}というようなことを老子があげてチームワークのもと和を強調されているが東洋哲学にはみなこの深さがある。日本にだつて一味、強味、親和^{キンワ}という野球精神で肇^{ハジ}つており和を強調されているのは聖徳太子さんばかりではない（この辺で黒田武士の血がみえた）。どのチームが立派か勝つか―それはチームワークのいかんによるが、学校でも団体でも国家でも世界でも、みな社会は共同作業なのだからそこに偉^{偉大}れた力を發揮してゆくにはこの野球が表現してゆく「チームワーク」の妙を会得すべきであるというのだつた。

近世精神もみにつけよう

先生はさらに「野球の話」から飛躍して、処世訓に移り、これからの青年は、

協同性（クーパーチフ）

専門性（スペシャリティ）

一体性（イクォリティ）

などを近世精神を身につけてゆかねばならぬとか、役にたつとはどんな人間のことか―などから、いい友だちを持つてなどのお話を頂いたが、ここでは紙面の都合もあろうから省いておく。唯とても印象の深いお言葉は、強く生きぬくという一点だつた。それは、

- ① 自分は宇宙の一部で絶対に尊いのだという自信をもてば強いくずれぬ（他人との比較で自分の価値をきめるのは弱いくずれる）
- ② 自分を正しく生かしてゆくのが強い（劣等観も優越観も弱い）
- ③ 自分の与えられた能力―それを發揮せずばやまずという自覚は強い。楽しい。（その自覚がないのは弱い）
- ④ あらゆる人が好きで、自己一体（調和）になれるのは強い。（好ききらいのある人は弱い）
- ⑤ 他人の価値を認め、長所だけがめにつくのは強い。（短所をつくのは弱い）
- ⑥ 人間関係を独立者同志、愛と友情で結び他人の才能を祝福できる人は強い。（支配と従属の関係でとらえるのは弱い）
- ⑦ 自分の良心を手腕に訴えるのは強い。（み

たされぬのは弱い）

⑧ 人生は人類の生成発展に寄与してゆくのが狙い、労働は手段、金や物は道具、名誉は結果、この幅の広いのが強い。（金と名誉のために働くのは弱い）

⑨ 生きる喜びにひたり、人生をたのしく、職業を包含して創造的に生きるのが強い。職業依存、人生を苦しい場にしてゆくのは弱い）

⑩ 内に無限のいのちが漲つて、惜しみなく愛を与えてゆく生活は強い―という十カ条は今もなお私の脳裡から離れないもの、先輩は有難いものだ。24枚という原稿の制限がきたので、これで筆をおくが若い頃は文字通り寧日なく、老いて古稀を迎えながら休むひまなく、すまないことだが「同志社」を偲う機会も少なかった。しかし学問の自由や々の聖域が、直接には無関係の政治運動―社会運動の手段として利用されるのを新聞で見るとき、ムヤミにハラがたつ、残念にも思うのだ。

大学の自治も学問の自由も本当はとても立派なのだが、これを守りきるにはこれを利用する政治運動ときっぱり区別してゆくことが大事だと思ふのだ。（六一〇大政平・評論家）

言葉の花束 続

——海外の大学から



カルビン・プリンプトン

△アーモスト大学総長▽

創立記念日は一致しません、十一月二十二日にはじまる週には、われわれの祝う感謝祭があります。感謝祭は純アメリカ的なもので、ジョセフ・ハーディ・ニイシマがかつて祝ったことのある祝日でもあります。同志社九十周年に際し、創立記念が京都での感謝祭としては適當なものでありましょう。

記念日を祝する集まりは共同体意識を象徴するものであり、それへの感謝のみならず、あらゆる感謝の心にはいろいろの理由が存在いたします。

われわれの祖先がなしとげた数々の偉大な業績にも感謝せねばなりません。歴史をふりかえてみると、火の発見、車輪やアルファベットの発明等、あるいはまた、大衆とエネルギー間の絶対量的関係を示す学問に対してさえ、人

類に敬意を表することはわれわれの伝統的なつとめであります。われわれはある人々、宗教、詩、芸術、あるいは音楽における業績でほめたたえます。また、その人々の示した建築工芸、建物、または工学技術でその人を賞讃もします。古代での七不思議がいまや対数的に増加してきているのであります。これら偉業のあやまった面がいつか人類を圧倒するやもしれないという不安はありますが、しかしそれらはまだ観念的なものであります。

しかしながら、少なくとも一つの著しい手ぬかりもあります。いったい人間のもつ公共の組織、団体とはどこに存在しているのでしょうか。ひとつの例外を除いて、何ともはやそういうものは全く成功をおさめているのはい言えないのであります。しかし、私が申し上げたいのは、大学というものこそ人間の作りだしたもつとも偉大な組織上の発明であり、かつ機構上の成果としてのもつとも良しとなすものであります。中央、地方各政府はいわずもがな政府機



構のどんなものよりもはるかにすぐれ、近代工場の流れ作業形態をはるかにぬきんずるものが大学であります。生命、自由、ならびに幸福追求の各種の権利を維持できることにおいて誇り高い政府形態に対して、大学とは、変化、発展や各種権利の増大を積極的に願うところであります。大学は、一方では知識の管理人でありますが、知識の維持でなく、拡充に、また保存でなくその発展にと主力を注ぐものでもあります。大学の業績も政府や実業界の業績も時と共に増え変化しますが、後者ではかたっむりほどの速度しかありません。人と政府形態の関係の領域はさほど変わりませんが、人間の心の領域とその深さははるかに成長発展してきているのであります。

私はなにも政治学者でもなければ、歴史学者でもありませんから、大学の一総長として、現代の煮えたつような事の推移——現状の流れや貧困、病气、無知の撃滅でなく、知識の発展、真理の探究や理解の推進という時流を感じ得

るのであります。

これら時流のあるものはかなり荒れ狂ってはいますが、それらといえ目を見開かせるに充分なものをもち、また大学を人間の所有する最もすばらしい発明の一つとする疑いはありません。最もよいとは、何らかの進展への大きな望みを含む意味においてであり、進展とは、単に「どのようにするか」とか「無重力を作り出すにはどうするか」という技術上のことではなく、「どうあるべきか」という根本的な意味においての進展であります。

拾頭や崩壊をたどってきたいくつかの政府を私は数えてはまいりませんが、私の印象づけられたことは、大学というものが政府のように崩れ去ることがいかにまれなことであるかという事実であります。大学自体が永続性のあることをあきらかに証明しているのであり、またそれ自体が発展しつつ維持され、拡充しつつ保持され、新しきものを採用しつつ古きものを排除しないというすばらしい機構のもたらした特質のかためでもあります。そういう機構こそ偉大なものであり、かつその機構こそ偉大なものであり、かつその機構を作り出すことで広く人類の感謝を得るのであります。

わずか九十歳を迎えた同志社はこの偉大な機構のひとつとして位置を占め、そして同志社の有する可能性は将来更に大きな約束を与えてくれるものであります。アーモスト大学は同志社との友好関係を誇りとし、われわれのこの関

係が、この先、より強くより深く進展してゆくことを希望してやみません。

学校法人同志社は合衆国においてよく知られ敬意をもって注目されております。同志社と精神的には極く近くにいるわれわれは、地理的にもそうであってほしいと思うのであります。それゆえに、同志社にこの九十周年を祝してご挨拶を申し上げますことは私のもっとも喜びとするところであります。と共に、この感謝祭に除して、同志社の存在に對し、心からの謝意を表するものであります。この記念日を幸福なものとならしめ給へ。同志社に記念日の多く来らんことを。

*

イー・ゲー・ペトロフスキー

*

△モスクワ大学アカデミア総長▽

ロマノソフ名儀モスクワ国立大学は、同志社大学の創立九十周年を祝賀いたします。

モスクワ大学の教授・教師・学生は、同志社大学の教職員に對し、有資格の専門家の養成の成功および学問と文化の分野における大なる達成を希望いたします。

人類の平和と進歩のために、われわれの大学の間の親善関係の発展と強化を望みます。

一九六五年十一月十日

C・マリオ・カッタベニ

△ミラノ大学学長▽



貴下をはじめ学長、教授陣、ならびに同志社理事會にたいして、御親切な御招待を心から御礼申しあげます。

残念ながら、この祝辞は、遅れてお手許にとどくことでしょう。なにぶん十月と十一月とは新学年度の開始と開講のために大いに忙殺される月でございますので。

しかしながら、私個人およびミラノ大学教授陣一同はごあいさつをお送りすることを心から願うものでございますし、さらに、貴学が高度のキリスト教研究機関としての中心的役割を果たしてこられた功績にたいしても、いっそうの御発展と御尽力を切に祈りあげるものでございます。

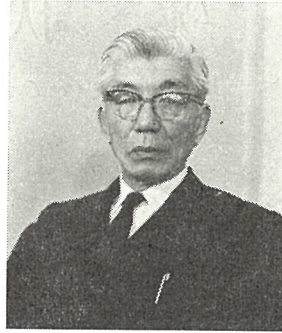
真心をこめて、ごあいさつのことばをおおくり申し上げます。

ミラノ・一九六五年十一月二十五日

学長就任に際して

このたび、はからずも大学長に選ばれ、今後三年間、同志社大学の学長として微力を尽すことになりました。

新島襄先生によって創立された同志社、九十年の伝統に輝く同志社、歴代の学長が心血をそそぎ、力を尽された同志社、そ



星 名 秦

の大学の学長の職に就くことについては、重大な責任をひしひしと感ずるとともに、微力な自分がいかにしてこの重責を完了し得るかについて、非常な不安を覚えるものであります。しかしながら、ひとたび学長として選ばれました以上、自分の全力を尽し、誠心誠意努力する覚悟であります。

現在、大学としては、解決を迫られている多くの問題を抱えているわけでありますが、私は、私の力の限りを尽し、大学の真の発展のために尽くしたいと思つものであります。

大学の使命が、教育と学問研究にあることは自明のことであります。ただ、それらが十全になされていくかどうかは問題があります。先ず、何よりも真理性への勇氣、理性への信念が大学内に漲ることが必要であります。同志社大学において、学問研究が今後ますます活発になされ、すぐれた研究成果があらることを期待します。そのためには優秀な研究者の確保、研究設備の充実がもちろん必要であります。

また、教育の面においても、多くの不十分さがあります。教師と学生との接触が十分でないことなども、その一つであります。したが、これらのことも、できるだけ改善し、新島先生が期待されたような立派な人物が、この大学から輩出することをのぞむものであります。

私は、大学における教育と研究について、右のように考えるものであります。現在の私立大学にとっては、経営上の多くの困難のために、その教育と研究の十分な進歩が阻害されています。私は、これらの困難について、私の全力をあげて解決に努力し、一步一步困難を取り除いてゆく所存ではあります。教職員のかたがたのご協力なしには、これをなしとげることは不可能であります。どうか、みなさまのご協力を得て、これらの困難を克服し、同志社大学の教育と学問研究が飛躍的に前進し、新島先生の期待に応え、世界と日本の進歩のために貢献できることを期する次第であります。

(大学長)

鎮魂歌

—長い長い夜であった—



奥村芳太郎

草いきれの中で（昭和13年 中国 湖北戦線で）

昨年八月と十一月に、毎日グラフでは二つの別冊を出した。それは満州事変から太平洋戦争まで毎日新聞社が守りぬいた、戦場写真集「日本の戦歴」前後編であった。

始めて世に出たこれらの戦場写真集は、従軍カメラマンが砲煙弾雨の中に身をさらして撮影した記録で、当時、軍当局から『不許可』の烙印を押されたものばかりであった。終戦後、占領軍の追及の手もきびしかった。そのため、これらのネガは、転々と場所を変え、最後は、毎日新聞大阪本社の地下倉庫におさめられ、ひそかに日の目を見る日を待っていたのであった。

何の粉飾もない真実を訴える千数百枚の写真は、われわれ日本人のかけがいのない重い経験を伝え、戦争への憎悪を「日本の戦歴」に投げつけた。

発売と同時に日本全国から投書や問い合わせが、編集スタッフに送られてきた。いずれも「二度と戦争をくりかえすべきではない」という主張と、一体、人間を犠牲にせねば得られないものが、人間社会のあつてもよいものだろうか……と訴えたものばかりであった。その反響は大きかった。

編集スタッフに寄せられた投書は五〇〇通以上にのぼった。われわれは手をつくしてこれらの投書や問合わせに答えた。この中には写真の中に自分の姿を発見した喜びを、当時の激戦を回想した手記と共に送ってよこした生き残りの勇士もいた。だが、それらは十通にも満たなかった。三〇〇万人を失った十五年戦争の々長い長い夜々がここにあった。

△日本の戦歴▽が、身をもって受けとめたのは、戦争の悲劇に寄せる鎮魂歌であった。英雄の存在しないこの△日本の戦歴▽には、自分を愛し、家族を守るむずかしさがかくされている。五〇〇通にのぼるこれら投書の数は、いずれも肉親を失なった悲しみと怒りをこらえながら、戦後の日本に融け合おうとしたはげしい主張があった。

○カメラマンが生命をかけた写真の数々がある。もし戦争中に国民の目にふれていたら、あるいはこのような破局に至らなかつたのではないでしょう。国民の死を国民の目からひたかくしにかくしていたこと自体に、既に軍国日本の敗北があつたのでしよう。あれから二十年、まだアジアの一角で血が

流されているとき、改めて日本人の歩んできた戦いの記録にふれることは、誠に意義あることと思います。日中戦争の昭和十五年、盧山の戦いで山田信夫上等兵は城壁をよじのぼっている際、機関銃で撃たれ戦死しました。そのとき東京では妻が一子を残して病死していたのです。妻の死も知らずに戦って死んだというので、当時、美談として大きく新聞にとりあげられました。いま私の妻がその娘なのです。私はこの本を手にして妻と何を話し合つたらよいのでしょうか……（東京都・練馬区 S・O）

○ニューギニヤのブーツで戦病死したと、公報のあつた一人息子そっくりの写真がございました。あるいは他人の空似かもしれないが、ニューギニヤと聞けば他人とは思えません。結婚後三ヵ月で主人に死別し父なしに誕生したこの子の、幸うすい生涯を思いますと、異郷で死ぬときにどんな思ひだつたらうといつも泣けてきます。

（大阪市天王寺 I・W）

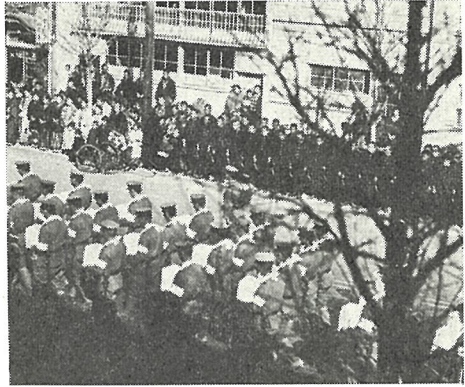
○ガダルカナル島へ出発の写真の中に父が写っていました。父は昭和十八年十二月ガ島で戦死し、父の顔は写真でしか知らず、

この本で父の最後の写真を見たときは何ともいえない気持でした。（静岡市 J・O）

○戦友の方からのお知らせで、亡き弟が写っているグラフをかこんで、当人や当時を偲んで涙を流しました。当人の戦死の様子や、遺骨送還の処理はされたと聞いていますが、帰ってきたのはただ白木の位牌のみでした。あきらめておりましたものの、その後ことあるたびに胸を痛めていました。どうかこの写真を送って下さい。

（防府市 K・S）

○僕の父は（母からよく聞いています）僕が一歳のころ、自分で志願して香取という巡洋艦に料理士として戦場に行き戦死しました。家に残っている遺品は父の写真だけです。父の親類がただいるということだけで、僕も北海道の市役所に何度も聞き合わせたところ、返事は不明とのことでした。僕は他人に頼ってはいけなれないと思い、自分の足で北海道に行って父の故郷の空気を胸いっぱい吸ってきました。自分の足で捜しても何一つ見つかりませんでした。どうか父の乗っていた香取の写真を送っていただけませんか……。（和歌山市 S・S）



長い長い行列が続く……(静岡で)

○私の夫は昭和二十年四月三十日、ルソン島で戦死しました。女の子が一人いました。が父の顔を覚え、二十三歳になりました。私はその後事情があつて再婚し、五人の子の母です。どうかこの写真を父を知らない娘のために送ってやってください。娘の住所は左記です。くれぐれも公にしないでください。

(埼玉県 I・K)

死者との対話は戦後二十年たった現在でも

つづけられる。この八日本の戦歴Vをあむまえ、私は東南アジアの各国を回り、各地で日本人墓地に案内された。無名戦士の墓の多いボルネオ、スマトラ島などにくらべると、手入れのゆきとどいたシンガポールの墓地は、いつも香煙が絶えることなく南方の花がにおつていた。二葉亭四迷や立派な寺内元師のお墓と対象的に墓地の片隅に日本人戦犯の墓があった。戦後、その罪に問われチャンギー刑務所で処刑された人は百人をこえたと聞いている。大きな黒アリがほう赤道下のこの墓地で私はこうした死者の訴えに耳を澄ました。思いであつた。北ボルネオ、サンダカンで、この地の情報官 Paul Sun Ching 氏は、私を市内を見下ろせる山の上に案内した。百数十人の中国人を記念する石碑が木の陰に立っていた。戦争中、非協力というレッテルをはって日本軍が処刑した中国人の霊をなぐさめる記念碑であつた。

○戦争の無情、非人間性、苦惱、疲労、別離、私たち日本人の二十年まえの行爲。この残酷な行爲もそれを行なったのが人間であるかぎり、私たちは知る義務があります。

(小金井市 H・T)

○中国の捕虜たちが大勢捕えられて、当時の竹下部隊に連行されてきました。この写真の右端に倒れているのは、日本の陸軍隊に殴打された者です。私はこのとき通訳でした。だがこの兵士は、大中華民国とその広大な土地は、どんなことがあつても日本のものにはならぬと絶叫したのです。私はこの兵士の言葉と主張をいまでも胸にきざみつけています。日本人に知らされなかつたこの「不許可」の写真を見て、私はこの兵士に負けず、戦争はくりかえすなと叫びたい。

(東京都中央区 K・M)

○夢にも忘れ得ぬいとい子供と申しますのも愚かしいと存じますが、二男の懐しい姿を見つめました。二男は昭和十九年十二月七日レイテで戦死しました。当時、特攻隊の若桜最年少者として新聞にはたびたび報道されました。子供の最後の便りの中には御社の特派員の方に人形をこつつけたという便りがありました。其後長男、三男も無事に戦地から帰り、いまでは男の子五人女一人の孫がいますが、戦争のない日本に

生まれた六人の孫達はほんとうに幸福だと思えます。十六歳で少年航空兵となり、十九歳で戦死したあの子は、ほんとうにかわいそうでした。長男の子(孫)が同じ十六歳ですので感無量です。(熊本市 N・O)

十六歳といえば私は同志社中学の三年生だった。軍国主義の風潮が、ようやく学園にそのツメをのびはじめた昭和十一年。キリスト教であるが故に、わが母校はきわめてこの風潮に神経質となった。京都一中、三中などの官立校に先がけて通学はもちろん授業中にもゲートルを巻かした。配属将校がサーベルを光らせてチャペルまでやってきた。優等生もわれわれのような劣等生もみんながこのどうまんな態度に腹をたてた。めったに意見や主張も一致しない年ごろの少年たちが共通した相手をもったのだ。堀貞一牧師が祈禱のときわが皇室の上にもくく死んでいった中国の兵士の上にも神のお恵があるように……といった言葉に、この現役将校はわれわれを集めて、ヤソの神と天皇陛下とどちらが偉いかと詰問した。誰も答えなかった。しかし軍人ともあろう者が、天皇陛下を比較の対

象にするなんて逆に考えれば妙なことだ。その後で話し合ったものだった。同志社高商でも大学でも何らかの形で配属将校が介入する問題が次々と起った。中学で配属将校が引揚げると声明したのもこの頃だった。その声明をたしかチャペルで聞いたように記憶するが、退役海軍大佐の肩書きをもつ野村仁作学長は、柔和な顔を崩すことなく拳で膝をたたき、同じく退役海軍大佐で数学と公民担当の堀外喜男教諭は、腕組みをして、現役陸軍中佐の後姿をにらみつけていた。話は横道にそれたけれど、十九歳で散った航空兵を思うにつけ、われわれはこの太平洋戦争を、勝者や敗者の立場とは別の角度からもう一度考えるべきだと思う。く戦没者はすべて犬死であったかというような意見は、勝者の側の考えかたで簡単に口に出すべきではない。三〇〇万の犠牲者の中には、自ら死地に投じたのだくという死者の国からの声もあるにちがいない。敗れでも死んでも人は何ごとかを訴えている。

○いかに戦争が悲惨なものであるか、ベトナム戦争で身にしみていっているはずなのに当事者が日本であるこの戦歴を見て、はじ

めて実感としてくる次第です。いままで空疎な戦争反対であったかが恥ずかしく思われます。(中略)人間を犠牲にしなければ得られないものがこの社会にあつてよいものでしょうか。私たちにとつて、この民主日本を一人一人が自覚して積極的に守つてゆくことは、民主主義制の義務であり、戦没者への最大の供養ともなりましょう。私たち青年はこれを機に、われわれの代に決して戦争をすまいと誓おうではありませんか(後略)(京都市左京区 Y・S 学生二十一歳)

そのころ、二十一歳の若者たちはく学徒出陣の歌くを口ずさみながら学窓から戦場に向かった。詩集を片手に恋を語る青春は彼らにはなかった。信じきった若者たちと反対に、疑いながらも死の淵に立たされた血みどろの彼ら――へきけわだつみの声のなかで、彼らは訴え話しかける。「生あらばいつの日か長い長い夜であった 星の見にくい夜ばかりであった」と言い交わしうる日もあるうか：

……同志社大学中途で出陣、北京で戦病死した松原成信君はそのとき二十三歳だった。

(昭十四中学卒・毎日グラフ編集次長)

同志社に期待する

大西洋三



送られてきた「同志社時報」をめぐっていると、たとえば山本宣治の話が出ていた（佐々木敏二氏『大隈邸時代の山本宣治』菅琴二氏『ともだち』）。私はお二人とも存じ上げないが、それらを拾い読みしていくうちに、何かしら歴史の古い学校に学んだことは幸せだなどという感想を抱いた。同志社、去年で九十周年を迎えたというその長い歴史が、そのまま明治以後の日本の現代史を物語っている（明治一〇〇年も近い）ようでもあり、その古い伝統に培われたみずからの数奇に今さら思いを新たにしているこの頃である。その歴史にも、しかし消長はあった。今日の隆盛に比べれば、私などの居た頃の同志社は沈滞の

どん底にあったのかもしれない。だから、入学試験などといっても、その競争はきわめて楽なものであり、勉強の好きでなかった私が受けるにはまさに最適であった。おそらく今日の同志社なら、私など最初から受験することすら諦めざるをえなかっただろう。それを思うと、まことにお淋しい先輩ではあるが、母校のほうが立派になりすぎて、今日自分が同志社の卒業生だなどと、何の顔あつてか公言しえんやである。

しかし、事實はともかく私が同志社を出たということだから、今さらどうしようもない。目下の心境は、社会の片隅でひっそりと母校の発展を喜んでいる一〇Bであるというにすぎない。そして事実私と同じ思いで母校を見詰めている人たちも多いことであろう。現に

私の周囲にもそういう人たちが数人いる。その人たちはみなつつましく、みずからの社会的役割を、肩を張るでもなく、黙々と立派に果しつつ生きておられる。こうした生き方をする人びとは決して目立つことがない。テレビや新聞等マスコミで騒がれることもなく、母校から注目されることも稀に、しかも誠実に日々々の責務を果しておられる。このような幾千幾万の同志社人たちが、しかし社会のどこかでかならず母校のありかたを見詰めているのである。母校よ、かれらの期待を忘れないでほしい。同志社は多くの人材を輩出した。歴史に名をとどめる人びとは無論のこと、現に有名人として、また一流文化人として社会に活躍している人びとも大勢見かける。これは心強いことである。しかしその反面、忘れられた社会の片隅で自己の信念を忠実に生かしながら働いている無名の校友たちも、かれら有名人に劣らず同志社にとっては大切な人びとである。私たちはそういう人びとを忘れずにいる母校にこそ親しみを覚え、またそうした温い母校を、それがどんなに大きな、一流の大学になろうとも、憧れているのである。

昭和十六年といえば、大平洋戦争開始の年であり、また繰上げ卒業がはじめて実施された年でもあった。私の記憶は卒業試験開始当日、精思館の試験場から出て、烏丸今出川の街角にあった小さな喫茶店内部にたちかえってゆく。二三の友人たち（現在某会社社長や、すでにレイテ湾での戦死者になったものもいた）と雑談中、突如ラジオの臨時放送で驚かされたのは、あの歴史的な対米英宣戦を布告した東条英機の声であった。重苦しい沈黙の中にそれを聞き終ったとき、一人の友はボツリとこう呟いた。「明日にでもアメリカの飛行機が日本に来る。こんなことをやらかして日本は負けるにきまつてるぞ」彼ののがにがしい口調に私たちは一言も答えなかった。そして私の脳裏でも、ちっほけな斧をかざして巨獣に立ち向っていく小資本主義国日本のあわれな姿が焼きついてはなれなかった。腹立たしい一瞬だった、自分にはどうにもならないままに叫び出したいような一念が、ラジオから流れ出る軍艦マーチの勇壮な、しかし空しい響きにむりやりかき消されて行ったあの時の虚無的な怒りが……

しかしそれも二十数年前の回想となった。クラスメートの半数は戦死し、日本はあの友人の予言どおり戦軍に敗れた。そして今日同志社は昔日以上に甦ってはいるが、思い出たあの喫茶店もなくなってしまった。学会その他で上洛の途次、同志社に立ちよつてみると、今出川通りを圧するモダンな校舎の堂々たるたたずまいに、今昔の感一人の思いに捉えられるのも私ひとりではあるまい。しかし、とりわけ私の眼を惹くのは、やはりあの赤レンガ造りの素朴な建物である。そこには歴史がある。ささやかではあったが、軍国主義的暴力に抵抗する人間のたたかひがあった。その頃の回想を私はある新聞にこう綴ったことがある。——戦争がまさに始まろうとした昭和十四、五年、嵐となつていよいよ吹き荒んでくる「人間否定」の暴力のなかで、やつとそれに目覚めたばかりのぼくらは意識的、無意識的に世相とは逆の方向に走ろうとしていた。まだ余燼が燃え残っていた西田博士を中心とする京都学派の書物は相当数の学生の関心の的であったし（例えば田辺元『歴史的現実』）また一方ではひそかにマルクス、エン

こうしてあの赤レンガ造りの建物とそのキャンパスは軍国主義的暴力からの学生たちの最後の避難場所であり、かろうじての自由の最終的堡壘ともなったのであるが……その赤レンガ建の中で私たちは、クロムウエルについて、ジャン・ジャック・ルソーについての講義を聞いた。また、山本宣治も進化論の講義はその建物の中でやつたはずである。

3

今は亡き旧師や学友の面影が、また激論を闘わせた若き日の熱気が、そのままあの赤レンガにこびりついている。歴史とはそういうものである。そして私もまた同志社とは無縁になつてしまったようだが、その頃に受けた価値あるさまざまなものに対する感謝の念は今も忘れられないでいる。当時の思い出は、しかし、すべてが暗い影をともなつていた。学生食堂の盛りし量が日まじに減少する。ピヤホールへの学生の立入りは禁止される。長髪は絶対禁止、軍事教練の強化、そして私服（特高刑事）の学内無断立入りの常習化等々、自由と愛に逆行するこのような一連の高圧的な強制が、よつやく人間として目覚めかけていたあの年頃の学生に対してどんな反撥心を

起させたかは、論をまたない。私たちは些細なことでも批判的にならないではおれなかった。そしてつまらないことでも不服従の態度を示しては仲間同志で自棄的な笑いを交わしたりしていた。子供じみた抵抗ではあったが、これがわれわれに許された最大の自由だったのである。学問思想の自由とか、大学の自治とかは教科書に書かれた「真理」でしかなく、現実とは無縁の絵空事であり、ほとんどすべての教授たちはその問題避けて通らざるをえなかった。学生は国策協力型か、無関心追随型か、でなければ自棄的反抗型の三つに分れた。この最後のタイプに属していた私たちは、だから、決して良い学生ではなかった。当時の言葉で言えば「非国民」的學生、不逞の輩であったのだろう。

その頃、ある文芸雑誌を出していた私たちは中立売警察署に再三呼び出された。そして当時の誰もが、あのうす暗い特高刑事室で長時間しぼられた経験をもっている。「お前らは立命館の学生を見習え」とよく怒鳴られたものである。この立命館の学生とは当時の右翼的な禁衛隊のことを意味したらしい。それでも私たちは考えを変えなかった。だから、

おそらく国策に協力せざるをえなかった当時の学校当局（同志社は廃校になるといふ噂さえとんでいた）にとっては、私たちは迷惑な学生であり、この点で先生方にも随分御心配をおかけした事と、二十数年後の今日お詫びしたい気持が一杯である。私たちのような不良学生でも、蔭になり日向になりかばって下さった先生方のお気持が、今日自分がその立場になってはじめて理解出来る始末であって、まことに感無量である。配属校の怒りを買った私が卒業不能になりけたのを、教授会で極力弁護して下さったある先生の話など、一生忘れがたい思い出である。現在教師の立場にある私が、それを自分に対する戒めとしたいと希っているのも当然であろう。

同志社は私たちの故郷、その寛大な愛の精神は多くの青年たちに勇気をあたえ、かけがえのない尊い信念を植えつけることによつて、立派に新島精神は生かされている。そして自由は同志社のいまひとつのシンボルでなければならぬこの愛と自由の灯の光りこそ、日本に平和をもたらし、世界の人びとを一つに結びつける唯一の絆である。この意味で同志社が隆盛であることは、日本のため、

世界のために望ましいことであり、今日の母校の繁栄を祝福したい私の気持もその点に由来することを強調したい。しかし、その自由も、ひよわな、権威と不正の強力に脆弱な自由であっては、もはやそれは自由とは言えない。かつての軍国主義的暴力の下で息たええながらも生きぬいて来た同志社であってみれば、ふたたび日本があのような暗黒時代に逆戻りしないためのすて石となるような、有為な人材を今後も多数輩出してゆく、そうした真の意味のデモクラシーの基盤に母校がなつてくれるよう、そして平和な幸福な日本史が同志社によって作られていくことを、私たちはねがってやまない。これまで、同志社は明治・大正・昭和の日本史にすくなくならぬ貢献をなして来たことは事実である。しかしそれは、同志社精神の真髄からみれば、決して満足のいく業績をあげて来たとも言えないことだ。いろいろ批判される弱点があったことも事実であろう。だから、私は将来の同志社にいつそその期待をかけている。無名の一卒業生として、いや、一卒業生だからこそ、こんな無責任な大言壮語も許されてよいのではないか。

（昭一六専卒・専修大学教授）